

「生育診断技術」の導入で高品質な丹後産コシヒカリの生産が可能です

(農林センター 丹後農業研究所)

幼穂形成期の生育診断による(※)生育量に応じて、第1回目穂肥窒素量を調節することにより、高品質な丹後産コシヒカリが生産できます。

生育診断技術で高品質を可能にする丹後産コシヒカリの施肥法

(※)生育量 = 幼穂形成期の(草丈cm × m²茎数 × 葉色SPAD値) ÷ 10,000

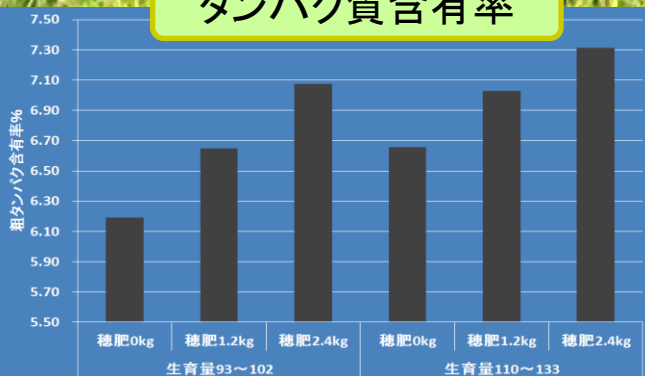
生育量と第1回目穂肥量が品質等に及ぼす影響

	生育量 93~102			生育量 110~130		
	穂肥0kg	穂肥1.2kg	穂肥2.4kg	穂肥0kg	穂肥1.2kg	穂肥2.4kg
m ² 籾数	△~×	○	△	△	×	×
登熟歩合	○	○	△~×	○	△~×	×
タンパク質	○	△	×	△	×	×
良質粒	○	△	×	△	×	×

○: 適正範囲
△: 許容範囲
×: 適正範囲を逸脱

生育量に応じて、第1回目の穂肥を調節することで高品質化が可能に(2回目は基準量を施用)

タンパク質含有率



収量とのバランスを考慮し、白米のタンパク質含有率は6.5%程度に

良質粒率



良質粒率は70%確保を目標

- ・生育量が100前後では第1回目穂肥窒素量を約1.0kg/10aに、120以上では無施用にすると、食味と外観品質、収量を兼ね備えた高品質な丹後産コシヒカリが生産できます。
- ・適正な籾数を確保することで1等米比率が向上し、販売価格のアップにつながります(2等米→1等米で10aあたりの売り上げ約10%増)。